
妹溺愛日記

月姫櫻姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹溺愛日記

【Zマーク】

N4092E

【作者名】

月姫櫻姫

【あらすじ】

清音の兄はずだまじく妹を溺愛する変人だったのだ・・・ドタバタコメディ

はたはたはた・・・

あたしの毎日は」のスリッパの音から始まる。
ぱつたん!!

勢いよく部屋のドアが開く

「清音ちゃん! ぐげっつ

あたしの部屋に勢いよく入り、枕の襲来をくらつたのは

「何度も乙女の部屋に朝っぱらから入るな! 兄貴! 」

そうである、毎日のように繰り返される、吉本新喜劇のよつな行動
は、あたしの実の兄によつて起こされている。

あたしの兄は、清光という十歳も歳の離れた、今年27歳独身の妹
溺愛甘々なチヨツト・・・いや、かなりの変わった人物である。

「清音ちゃんヒドイ・・・」

少し重たい枕を持ち上げ、あたかもそれが、あたしであらうかのよ
うに愛撫するのは変態の域を超えている。

しかも、花柄にウサギのプリントをした、兄貴特製のエプロンは、
はつきり言つて悪趣味だ・・・

「やめい!! 気持ち悪い!!」

枕を取り上げると、兄貴にそつこつた。

兄貴はめげずに、笑顔で

「清音ちゃん、朝ごはん作つてあるよ(はあと)」

あたしは、げんなりして

「ありがとう、着替えて行くから」

しかし、そういうところは気の利く兄貴だ、いや、そうだから27
にもなつて嫁がこないのか?

血縁者のあたしが言うのもなんだが、兄貴はあたしを溺愛する所や、
変な趣味をしている所以外は、何でもこなす美形で、しかも大学院

教授だ。

あたしを溺愛するのも、何故かわかる、あたしが1歳のときに、両親と乗った飛行機が墜落した以外は死亡した・・・あたしたちは親なし子になつた。

18歳の身空で、赤ん坊を抱えて生活するのは、大変なことだっただろう。

両親が、多額の保険金を残してくれたことと、飛行機会社からの見舞金で、親族はあたしたちを引き取りたがつた、が、しかし、兄貴はそんな親族を跳ね除け、あたしの面倒を見ながら高校、大学、大学院までいった。

そして今は、名の知れた著名な学者というわけだ。
あたしは着替えながらそう考えた。

「清音ちゃん、もう少しバストがあればね」
「そうそう、あたしも気にしてる・・・ってなに見てるんじや！」

ゲシツ

兄貴にかかと落しをくらわしてやつた。

兄貴は床にのびながら

「・・・わが妹ながら見事」

「いいから、早くでてけ」

あたしは、パジャマの前をあわしながら、兄貴を転がして外にだした。

毎朝がこんな調子・・・

そりや嫌われているよりはいいけど・・・

毎朝がこれじゃ疲れる、あたしは制服のリボンを結びながらそんな事を考えていた。

制服に着替えると一階から階段で降りていく、兄貴特製の毎日の朝ごはんのいいにおいがする。

今日は目玉焼きのようだ。

ダイニングに入ると、ちょうど兄貴が、味噌汁をついでくれていた。

「おはよう清音ちゃん（はあと）」

いい加減この兄貴は（はあと）をつけるのをやめていただきたい。
しかし、行動と腹は別らしく、兄貴の特製ケチャップで書こう！清
音名前入り目玉焼きをおいしくいただいている。

兄貴は何でも出来る。

ご飯なんて、フランス料理シェフも逃げ出すぐらい美味しい。
うん、不思議。

ご飯を美味しくいだいしている、あたしを見て兄貴は二口二口して
いる。

「なによ」

「清音ちゃん、美味しそうに食べてくれるから嬉しくて」
・・・そんなことを言わると少し照れる。
「美味しいの美味しい食べて悪い？」

意地悪く言つ。

こつこつこつこつは、あたしは可愛くない。
どうしても、悪く言つてしまつ。

兄貴はそんなんあたしを、おみとうじだ、とばかりに、こいやかに見
ている。

今更ながら兄貴を見る。

兄貴は、かなりの美形だ。

栗色の髪、もちろん天然の色、を長くして肩で結んでいる。
そして日本人なのに、縁がかつた知的な瞳

あたしとは正反対

あたしは、腰まで伸ばした天然満載のこれでもか！
とばかりに言つていてる黒い髪をしている。

瞳もこれまた、真っ黒。

兄貴は、ミスユニバースにもなった母親似

あたしは、警官だった父親似

ああ・・・

どうしてこんなに違うのか知りたいぐらいだ・・・

半熟の田玉焼きを食べながら思つていた。

「ねえ、兄貴？」

「なに？ 清音ちゃん」

「兄貴は何で結婚しないの？」

兄貴は、満面の笑みで

「清音ちゃんが、お兄ちゃんの一番大切な女の子だからだよ。一番目以降はつくらない、どんな人よりも大切なんだよ」

素直に書直に言われてしまった。

あたしはどんな顔をしていいかわからなくて、残っていた味噌汁をかけこみ

「いつてきます」

鞄を持って兄貴の顔を見ないで家をでた。

後ろで兄貴が「いつてらしゃい」とにこやかに微笑んでいるのを横目に見ながら・・・

登校途中は大変だ、あたしの通つている聖風学園は丘のてっぺんにあって、通称「地獄の三年坂」という誰が付けたのかわからないが、その名に等しい過酷な上り坂があり、冬のマラソン大会では卒倒者だらけになる、今は春だからいが、夏は日射病に熱中症、軽い森になつてるので冬は遭難者もでる。

それに、兄貴も出ている高校なだけあつて変わった人物が多い。

仮面をつけた生徒

全身にリボンを付けた生徒

多種多様である。

バサツ

「うわ！..」

いきなり田の前にピンクの物体が現れた。

「兄貴！..」

ピンクの物体はピンクの白衣に暴走族のよう背中に「清音命」と書かれたとてつもなく恥ずかしいものを着ている兄貴が、田の前の木の枝に逆さまにぶら下がっているものだった。

「清音ちゃんたら、お兄ちゃんのお手製に重箱お弁当忘れるんだから～ん」

差し出されたのは、「清音ラブ」とかかれた風呂敷に包まれた重箱だった。

変態学園といつてもここまで変態はいない、おなじ学校の生徒がクスクス笑うのを聴いて、あたしは真っ赤になり知らない顔をして、通り過ぎていった。

「清音ちゃん」

兄貴は木から身軽にぐるりと回って降りてきて、生徒の拍手をもらっていた。

きゅぴきゅぴ

と鳴るこつこづぱずしい靴を兄貴は穿いている。その幼児のような音があたしの後から近づく、あたしは早歩きになつて、それから逃れようとするが

きゅぴきゅぴきゅぴ・・・きゅぴ！

「清音ちゃん きよねん」

追いつかれて抱きつかれてしまつた・・・

はたから見たらただの変態行為だ・・・

・・・恥ずかしいからやめて

「なんで？清音ちゃんこの白衣と靴大好きだったでしょ？」

「いつの話だ！い・つ・の！」

「ひどい・・・にいにいつて後追いしたり、にいにい大好きついてくれてたでしょ？」

本当にいつの話だ。

「昔はそれでも、あたしはもう17歳なんだーいつまでも兄貴にしがみついてる子供なんかじゃないんだ！帰れ！」

あたしは、重箱を引つたくり坂道を駆け上った。兄貴の足音は聞

「えらい。やつと静かに登校が出来るとおもつたら今度は

「よー・変態兄妹」

嫌なやつに見つかってしまった。

「あたしは変態なんかじゃない！美樹！」

美樹は同じクラスの席が隣の奴だ、しかも、家までお隣ときてる。小さい頃よくいじめたという経験からか、中学にあがつたぐらいいから反対にからまれるようになつた。

「怒るなよ、かつこいい幼馴染だろ？」

あたしは、走つてきたので息があがつてているが

「か、かつこいいですって？どこが？小学校までおねしょしてたくさんに」

美樹は、真つ赤になつて

「余計なことは早く忘れろ！・・・もつてやるよ」

つと、重箱を奪つた

「毎回毎回すげーよな清光のやつ」

「代わつて欲しかつたらいつでもレンタルするよ

「いるかよ！」

「はあはあ・・・疲れた」

「地獄の三年坂を駆け上るのは変態の証拠か

きゅぴきゅぴきゅぴきゅぴ

「そうだよーん」

話に割り込んできたのは、スキップをしながら坂を軽やかに登つてきた兄貴本人だった。

「げー！・変態」

兄貴は息ひとつあげずに

「変態で結構！清音にちよつかい出す奴は誰であのつと許さん！」

「ちよつかいって、俺なにかしたのか？」

「清音に好意を・・・」

「あわわわわわわ」

美樹はあわてて大声をだした。

「清音に手を出したら小学校五年生のときに撮つたおねしょ記念写真をばらまくからね」

ふふふと兄貴は白衣のポケットから数枚の写真を取り出した。

「わー やめろよ！！」

慌てふためく美樹

「ふふふ、他にも夏、全裸で寝てる写真もあるんだよ？みきちゃん「なんで、んなもんがあるんだ！！ってか俺はみきじやねーよしきだ！」

「みきちゃん、17歳にもなつて愛用のティベアのアンダルセンとおねんねも可愛い」

美樹は、真っ赤になつて

「なんであんたがそんなことを知つてるんだよ……」

兄貴はにやりと微笑むと

「みきちゃん・・・いい加減カーテンを閉める事を覚えよつね」

美樹は、はつとなつて

「盗撮か！――！」

「みなさ～ん！！みきちゃんの可愛い写真ですよ～」

きゅぴきゅぴきゅひと兄貴はスキップして学校に向かつた

「俺はよしきだ！！待ちやがれ！！この変態やううーーー」

それがあわせて美樹も坂道を駆け上がつていく

あたしのお弁当を持ちながら・・・

「待つて！！お弁当！！兄貴！美樹！」

あたしも走つて坂道を駆け上がつた。

「はあはあ・・・」

地獄坂を上りきつたら、兄貴と美樹が乱闘をしていた。

否

兄貴に美樹が遊ばれていた。

「アーニア、おめでたん」

「ちがうだ――――――」

これも毎朝のこうけいだつたりする。

「ほら、みきちゃん皆みてるよ~」

れぬひれぬひとづが鳴る

こつぱずかしい · · ·

兄貴は楽しそうにバレエのステップを踏みながら、ルンタツタと美樹をからかう

美樹も負けじと追いかけている

二〇一九年五月九日

あたしが叫ぶと二人は喧嘩をやめます。」
「…………」
あたしの元に帰つてくる。

۱۶

「あたしは、美樹から重箱を引いたくじ

美樹は「すいません」と素直に謝った。

兄貴にも

「兄貴もいぢいち美樹をからかうんじゃない！――」

冗談はへりへりと笑しながら「めんね」と

喧騒が終わると、生徒たちは何事も無かつたかのように登校してゐる。

あたしも、重箱を抱えて校門をぐぐつた

一
い
つ
て
ひ
し
ま
い
」

後ろで兄貴の声が聞こえる。

本当に反省しているのか？

「美樹も早く行かないと登校時間過ぎるよ」

「お、おひ、いこうぜ」

「いつも反省してるので？」

「反省弁当持ります」

あたしは、一瞬悩み、美樹に重箱を渡した。

「次、兄貴と喧嘩したら絶交だかんね」

「だつて、清光の奴がかかつてきたんだぜ」

「馬鹿はほつておきなさい」

美樹も、考えて

「いや、でもあんな写真・・・」

「嫌ならカーテンつけなさいな」

「はい・・・」

素直な美樹に顔を向けると、うなだれでいるのが分かった。
言い過ぎたかな？

「今日うちに来なよ美樹も兄貴の被害者なんだから、クッキーぐら
いは作つてやるよ」

もの凄く嬉しそうな顔をして、一転

「清光もいるんだろ？」

「兄貴なら脣から大学だからゆつくりしていきな

「やつた――――」

何をそんなに喜ぶのだろうか・・・

あたしたちはそろつて教室にはいった。

スパパン

「なに！」

クラッカが派手な音をたてて、あたしたちを出迎えた。
思わずカバンで防衛して。

紙の襲来にあい、あたしは何事かと思った。
あたしの誕生日じゃない

美樹のでもない

なんなんだ？

「清音と美樹一緒に登校記念百回」

ひょっとこの、お面をかぶった男子が言った。

「仲の良いお二人に祝福を！」

マントをつけた女子が、あたしに花飾りをかぶせた。

「いつから付き合ってるの？」

王冠をかぶった生徒が聞く

あたしは「？？？」だ

付き合つた？誰と誰がだよ・・・

あたしは、まだそれだけで済んだが

美樹は男子にかこまれて、なにやらこそこそ聞かれていて・・・

「そんな関係じゃないよ！！」

美樹は大声で言い真っ赤になつて、頭から紙をたらしたまま席に着いた。

あたしも、ならつて紙を全身から外しながら席に着いた。

「ねえ、これなんの行事？」

あたしがそう聞くのも当然

ここは学校はスローガンが「楽しいことはみんなでしょう」

運動部が一勝でもしようなら、「一勝祭り」が開かれ、負ければ

「一敗祭り」

何でも楽しんじゃおうが、モットーなのである。

兄貴に進められて入学したが、あの兄貴の魂胆だ・・・

見え見えたのに、特有の制服のかわいらしさに引かれてしまつた・・・

・・・あたしのばか。

とにかくなんでも、祭りにしてしまうのだ。

では今日の祭りは何なんだ？？？

わーーと他クラスまでやってきて、机でやぐらが組まれてどこからともなく、浴衣姿の生徒が現れ、やぐらの周りを盆踊りしだす

そこに担任の常識をわきまえた、仁科先生があらわれ

「何なのー！」の騒動は！…やめなれー…」

常識的な反応をしてから

「私の教育方針がわるいのね・・・うわ—————ん」

号泣しながらどこかへ行つてしまつた・・・

哀れやのう

こんな高校に入らなくとももつと一般人がいる学校に行けばいいのに・・・

う～これじゃ今日も授業はないな

あたしはそう判断して角の席に座りなおして

風呂敷から重箱の弁当を取り出した。

今日の重箱は3段で、上から、おかず、ご飯、デザートだった。

ご飯には手の込んだ

「愛ラブゆう（はあと）」

が、書かれていたが、こつものことだ気にしない

「いただきまーす」

あたしは誰に言つわけも無くやつづぶやいて・・・いたはずだった

「おいしい？」

大好きなショウガ味のだま～焼きを思わず喉につまらせた

「んんんん・・・・・！」

「はい、お茶」

お茶を受け取つて一気飲みしてキレた。

「兄貴！…なんで学校まで来てるんだよ！しかもあたしの代えの制服着て！…！」

しかも、その上から例のピンクの白衣を着て・・・

あたしは、絶望した、この女装した上に恥ずかしい白衣まで着て学

校の教室に溶け込んでいるのを・・・

誰も、部外者がこつそり入り込んでいるのに気がついていない。

唯一見つけたのは男子に取り囲まれていた美樹だけだった。

「あー—————！…！…変態の根源！」

よく考えたら、その妹んですけど、ま、いいか。

「せぬ二(せぬふ)おれむぢ 二」

「九月十九日」

男子の一団からするつと抜け出て、美樹があたしの座つている、机まできた

卷之三

「可愛いでしょ」

悪夢だ・・・兄貴はうつふんとクルリと回つて見せたのだ・・・

「なになに？その綺麗な女子」

卷之三

「おお、と 漢書かやんのお姫さんで」

兄貴は調子に乗つて絶対領域までつくつてゐる・・・

あれ、涼音、お兄さんと一ノ暮にじり、なか

「ばらすな！恥ずかしい！！帰れ！！」

あたしたちの命は

「私、皮女こ立たて侯こう浦うら！」

「あたしも！」

さあ、おきと只貴は、女子は困るでしょ。な

「あざる」

あたしは、山芋の煮物を口に運びながら言った。

清音女式

肉の田舎を。一飯このせながら

甘い肉の味が心を落ち着かせた。

「とにかく、兄貴は昼から大事な講義があるんだろ、帰つてください

い

「清音ちゃん冷たい！！！」

そりや冷たくもなりますわよ

客観的に見て、あたしより制服似合つてゐるし、もててゐるし

最後に、テザートの洋ナシを食べて、

「はい、ご馳走様でした」

重箱を恥ずかしいネーミング入りの風呂敷に包んで兄貴に渡して
兄貴を窓から外に落としてやつた。

見ていた美樹が

「おまえ、二二三階だぞ…………」

落つこちた兄貴をさがそうとして

キュウピーン

「清音ちゃん僕の愛をわかつてくれたんだね」

靴にしこんであつた、ばねでキュウピーンキューピーンと軽くはねていの
美樹はひつくり返つてる・・・

生徒が氣づいてやんややんやと歓声をあげている。

「帰れ――――――！」

ああ、普通の学園生活がしたい！

でも、この学園にいる限り、まともな生活は出来ないんだひづな・・・

と思ひながら、跳んできた兄貴をお客様専用トイレスリッパでシ
バク事を忘れずに

ミヨーン

「イタ」

スペコン

ミヨーン

「イタ」

スペパコン

「イタた」

・・・ふぢ

「いいかげんにせー」
キレイて窓から叫んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092e/>

妹溺愛日記

2010年12月29日02時24分発行